

松本千代栄研究

—「清里研究会」における舞踊創作学習指導法—

順天堂大学 中村恭子

I. はじめに

「人間性の発展」を目的とした昭和22年の学校体育指導要綱の改訂に際し、松本は「ダンス」として「表現」すなわち「一、表現技術」「二、作品創作」「三、作品鑑賞」の「基本的指針」を示した。しかし、それまでの画一的な教材指導のみを行ってきた多くの指導者たちは、児童・生徒の主体的活動を中心とする表現や創作の指導に戸惑い、ダンスをめぐる混乱と指導の低迷が続いた。一方、昭和39年の東京オリンピック開催を前にして、体育は体力増強・競技力向上を重視するようになり、ダンス再検討の論議が持ち上がり始めていた。

こうした状況の中、昭和37年に「清里研究会」が発足。本研究の目的は、「清里研究会」の実態を調査し、そこでの「舞踊創作学習指導法についての提案（松本提案）」から、当時の松本の舞踊教育観と影響を明らかにすることである。

II. 研究方法

文献研究および清里研究会参加者と松本千代栄氏本人への聞き取り調査による。

III. 結果と考察

1. 「清里研究会」の実態

(1) 「清里研究会」設立の趣旨

ダンス存続の危機的状況を感じた松本は、「このまま創作が指導要領から削除されることがあったとしても、子供たちへの教育的価値を確信して立ち上げられる指導者を育てたい」との考えから、指導力を養成するだけでなく、ダンス創作学習の理念の確立とその指導法の開発を図るため、各地の意欲的な指導者を集め、長期計画の創作学習指導法研究会を企画した。昭和37年に「第1回清里研究会」が発足し、以後9年間継続された。(別表)

(2) 「清里研究会」の実施要領および参加状況

主な活動は年1回、3泊4日前後の日程で開催された山梨県・清里での合宿研修である。

研修は①松本からの「清里研究会への提案」(研究主題)、②小・中・高・大学の教育課程別の研究・討議・実技・指導案作成・発表、③研究成果を各自が現場に持ち帰っての実践、④実践結果の報告、⑤次の課題を検討する、という手順で進められ、研究会自体が問題解決型の研究会であった。

各回の参加者は全国各地からの小・中・高・大学の指導者、さらに各県の大学教育学部やその付属校など、教育課程全体に影響をもつ指導・研究者の自主的参加を得ている。(別表)

2. 「松本提案」の内容と舞踊教育観

各回の松本提案は実践研究が進むに従い、次第に構築されていく。主な内容を以下にあげると；

(1) 「舞踊創作構造」と「表現指導の着眼点」

舞踊表現の特性を「作品の構構性」「動きの律動性」「感情性」「空間性」「集団性」の観点から分類・分析し、それらの組み合わせから「動きの表現的性質」が生まれるとして、「表現指導の着眼点」を導いた。(別表)

(2) 「舞踊創作学習における基礎の考え方」

従来の創作学習指導の問題点を基礎学習に見いだし、「創るためには創る要素をふくんだ基礎でなければならない」という指導理論を打ち出した。すなわち、全体性優位をみるゲシュタルト理論を底流に踏まえているといえよう。具体的には、表現の「拠点」を与えて動きの工夫・開発の練習に取り組みせること、個人技能を高めるだけでなく、基礎の段階から集団での表現に慣れさせるべきだとした。

このような基礎学習の発想から「ダンス・ウォーム・アップ」という、創作学習の導入から心身をほぐす指導法が導き出された。

(3) 「舞踊創作過程」と「学習段階に応じた指導」

創作学習の過程を「仮定期」「探索期」「完結期」の3段階に分け、それぞれの段階における活動内容と指導の要点を示した「創作指導の基本的指導法」を提案している。指導の要点として、表現の「中核」「動きのことば」「全体の運び」の発想法、「デッサン、フレーズづくり」グループ活動への「相手から引き出すための助言」、作品の発表・鑑賞についての「評価」に言及している。(別表)

(4) 発達段階と学習内容・指導法

対象者の発達段階による身体運動技能や表現技術、興味や経験の発達の違いを捉え、それぞれの発達段階に応じた学習内容の検討や指導法の研究を進めた。

3. 「清里研究会」の成果と影響

会の研究成果は各地での実践・実証を通じてより確実な指導法の開発と普及に貢献した。そこでの理論の展開は松本自身の指導法研究の基盤ともなり、以降の研究活動の充実に影響を与えている。昭和43年の学習指導要領には創作ダンスのより具体化した内容が示されるに至っており、研究成果のひとつといえよう。さらに、各地でのその後の実践研究の継続とその成果(相場、大島、浜本、中間ら)は、舞踊教育の発展における重要な転換点に位置した清里研究会の意義を再認させるものであろう。(別表)

なお、本研究にあたり、相場了先生、浜本量子先生、中間千恵子先生から貴重な資料ご提供いただきました。また、松本千代栄先生ご本人からも多くの資料、ご教示をいただきました。心より御礼申し上げます。